

寄稿論文

「言葉というものはそのままにしておかねばならない」

——イザヤの頑迷預言を事例として——

鍋谷堯爾

(口述筆記 砂原律子)

序

1. ルターの「聖書のみ」の射程
 2. 今日の福音的な立場とは
～新改訳第三版の翻訳理論を手がかりとして～
　トランスペアレントな読み方はどのようにして可能か
 3. 聖書を全体として読む
～いわゆる「頑迷預言」の新約聖書における引用を手がかりとして～
 4. 「頑迷預言」の新約聖書におけるその意味内容の拡散
 - (1)種まきのたとえ
 - (2)ルカー使徒の働き
 - (3)ヨハネの引用
 5. ヨハネ福音書から再びイザヤ書へ
～聖書解釈の循環性～
- 結語 旧約から新約へ、そして新約から旧約へ

序

かつてエルンスト・ブロッホは「聖書批判が始まるより前の時代には、ただ神の唯一の言葉があつただけで、その言葉は個々の部分にいたるまで神によって靈感を与えられたか、あるいは書き取られたとさえ思われていました。預言者たちは、ここでヘーゲルの表現を用いると、自分が世界精神の書記であると感じていたのです。その後その世界精神の強化は、文字どおりただ聖書だけを全教会と教会の教えの拠り所にしようとしたプロテスタンティズムにおける転換によって行なわれました。『言葉というものはそのままにしておかなければならない』、とルターは言っています」¹と述べている。

今日のポスト・モダンの時代において「言葉（聖書の本文）というものはそのままにしておかなければならない」とのルターの言葉は、ブロッホの言うようにもはや聖書批判に耐え得ないものなのであろうか。

ルターが「聖書のみ」の原則を打ち出してから、彼の生涯を見る時、いわゆる塔の体験からヴィッテンベルグのシュロツ・キルへの扉への「95か条の免罪符抗議文」の張り出し（1517年10月31日）、ヴォルムスの国会での「我ここに立つ」の宣言（1521年4月）、同年末のドイツ語新約聖書の翻訳、エラスムスとの自由意志と奴隸意志についての論争（1525年）から旧新約聖書の翻訳の完成（1535年）にかけて、彼の「聖書のみ」の原則のニュアンスは微妙に変化していることがわかる。

1. ルターの「聖書のみ」の射程

最初はカトリック教会が聖書と共にローマ教皇の勅令、教会会議の決定、教父たちの証言を重んじたのに反対して、ルターは「聖書のみ」を主張したのだが、これは権威についての論争であった。

また彼は従来のローマ・カトリック教会の聖書の本文についての四重の解釈に反対して「一つの本文には一つの意味」、すなわち「歴史的文法的な意味」

¹ エルンスト・ブロッホ『聖書批判の意味』、教文館、1992、86～87頁

であり、同時に「キリスト論的な意味」であると主張した。

次に、翻訳においてヴルガタ・ラテン語訳聖書に固執するカトリック教会に対し、聖書原語からの判りやすい母国語聖書訳を重視した。

ところがルターは52才（今で言えば75才位）の時に、『ドイツ語著作全集第一巻への自序』において「聖書の読み方」という箇所で、詩篇全体を読むための三つの原則として「祈りと默想と試練」をあげて次のように言っている。

「第一に、聖書は他のすべての書物の知恵を愚かとする書であることを、あなたは知るべきである。なぜなら、永遠の生命について教えてるのは、この書以外にないからである。だからあなたは、自分自身の考え方や理解にまったく失望すべきである。……第二に、あなたは默想すべきである。すなわち、あなたは聖書を単に心の中で繰り返すだけでなく、口に出て、聖書の文字どおりのことばに従ってこれをいつも繰り返し、これに習熟し、一読、再読し、聖霊が言おうとすることに熱心な注意と考察を向けるべきである。……第三に、……試練こそ試金石である。試練は知り、理解することをあなたに教えるばかりでなく、神のことばがすべての知恵にまさる知恵としていかに正しく、いかに真実で、いかに甘く、いかに愛すべく、いかに力強く、いかに慰めにみちているかを経験することをも教える。」²

それによると、宗教改革の原則である「聖書のみ」における歴史的文法的な意味は、自分の考え方や理解を超えたところに聖書の意味があり、神が御子を通して聖霊を送り、我々を照らし、導き、理解を与えてくださるようにという祈りを伴った「聖書のみ」ということである。

2. 今日の福音的な立場とは

～新改訳第三版の翻訳理論を手がかりとして～

トランスペアレントな読み方はどのようにして可能か

² 德善義和「三 聖書の読み方」『マルテン・ルター 一原典による信仰と思想』、リトン、2004、49～50頁

昨年新改訳聖書の第三版³が出版された。そこでは従来の「ダイナミック・イクвиヴァレンス」（DE）とか「ファンクショナル・イクвиヴァレンス」（FE）に対して「トランスペアレント（透けて見える）」な訳を試みたと言われている。

「原文の形や言い回しを残した訳、時にはとっさに意味をつかめないような、ぎこちない訳でさえありうる。……こんにちの人にわかりやすいことばをと配慮し、ダイナミックまたは機能的に等価とみなして行う言い換えが、時には人々を聖書の原意から遠ざけてしまうことも起こりかねないのだと指摘します。そして、むしろわかりにくいと思える表現や原意は、言い換えによってではなく、聖書全体を繰り返し読んで慣れることにより」⁴見えてくるものである。すなわち、「透けて見える」とは、何度も繰り返して読むことによって見えてゆく意味であり、逆に言えば一読では判らないということである。

このトランスペアレントの読み方とは旧新約聖書を全体として読むことを前提としている。それは、宗教改革の聖書解釈の最も重要な原則のひとつである。

それでは「聖書テキスト」を繰り返し読んでいれば、テキストの意味が透けて見えるのだろうか。繰り返して読むとは、旧約聖書の創世記から新約聖書の黙示録までを何度も通読することだろうか。たしかに通読もひとつのことであろう。しかし、聖書の各巻の総論的立場を知り、また、各書巻の区分とその主題に従って読まなければ通読を何度も繰り返しても、透けて見えるものが見えてこないのでなかろうか。

さらに、聖書を全体的に読む場合に重要なことは、旧約聖書と新約聖書の関係をよく知ることである。その関係を正しく知ることによってのみ、繰り返して読んだ時に透けて見えるものがある。

³ 『新改訳聖書』改訂第三版、日本聖書刊行会、2004

尚、本論文中に聖句を引用する場合、特別の断わりがない限り『新改訳聖書』第三版を使用している。

⁴ 岸本 紘「<新改訳聖書>の歴史と現状と将来」『聖書翻訳を考える』、いのちのことば社、2004、14～15頁

本論文はその一例として、イザヤの「頑迷預言」を取り上げて、「繰り返して読むことによって、透けて見える」ことのための方法論について考察してみたい。

3. 聖書を全体として読む

～いわゆる「頑迷預言」の新約聖書における引用を手がかりとして～

それではなぜ「頑迷預言」に焦点をあてるのか。普通、イザヤ書の「頑迷預言」は難解なために、説教や聖書講解などで避けて通るテキストである。ところが福音書記者、パウロによって積極的に受け止められ、それは聖書の使信の中心となっている。我々も積極的に取り組むことによって、ポスト・モダンの時代の聖書解釈に新しい切り口が与えられ、新しいメッセージが与えられてくるのではないか。

【頑迷預言 イザヤ書6章9～10】

すると仰せられた。「行って、この民に言え。『聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな。』

「この民の心を肥え鈍らせ、その耳を遠くし、その目を堅く閉ざせ。自分の目で見ず、自分の耳で聞かず、自分の心で悟らず、立ち返っていやされることのないように。」

וַיֹּאמֶר לְךָ וְאֶמְרָתָ לְעַם הָעָם שָׁמָעוּ וְאֶל-חַבִּיעַ וְרָאָ רָאָ וְאֶל-תְּדַעַּ:
הַשְׁמַע לְבַדְּבָעַם הָעָם וְעַנְיִינְיָ הַכְּבָד וְעַנְיִינְיָ הַשְׁעָרִירָה בְּעַנְיִינְיָ וּבְעַנְיִינְיָ:
יְשִׁמְעַ וְלִבְבָּרְ יְבִין וְשַׁב וְרַפְאָ לְ:

これまでイザヤの召命物語に感動し、主に献身を誓った人たちは数えきれない。それにもかかわらず、6章9～10ほど無視されてきた本文も少ないと思われる。それは「心を頑なにするメッセージ」を理解することが、非常に難しいからである。

ゲゼニウスは6章9の命令形を未来形ととることによって説明しようとした。ルターは「わたしの民」と呼ばれず、「この民」と呼ばれていることに注目し、神はもはやイスラエルを捨ててしまわれたと言う。「神の隠れた御旨を詮索して、自分を苦しめることはやめようではないか」と言って、解釈を避けている。また、カルヴァンやアレグザンダーは、神の予知がそこに示されていると考える。

第一に注目すべきことは、「聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな」が、イザヤが民に向かって実際に伝えなければならないメッセージの内容になっていることである。しかし、実際に預言者がこのようない言葉をそのまま告げるということがありうるだろうか。また、告げたとしたら、どのような結果が生じるだろうか。伝道集会で説教者がこのように語ったらどうなるかを想像してみて、この表現の持つ不思議さに驚くところから釈義は出発しなければならない。

「聞き続けよ」「見続けよ」は、それぞれの動詞の命令形と不定詞独立形が結びつけられており、意味は、連続とか繰り返しを表す。「聞き続けよ」「見続けよ」。連続にしても繰り返しにしても、一体何を見聞きし、何を悟ってはならないのか。直接的には、聖なる神にお会いして罪の赦しを受けた体験の証しを指すと思われる（参照：使22章6以下、26章12以下）。その体験の証しを聞いても、人々はかえって心を頑なにする（参照：使22章22、26章24）。今一つの解釈は、1～5章のメッセージを指すと考えることができる。メッセージを聞いても「イスラエルは知らない。わたしの民は悟らない」（1章3）。彼らの運命は不治の病にかかった病人と同じであり（1章5以下）、ウジヤの死はその象徴であり、先触れであった。これらのメッセージは、イスラエルの歴史と、その中に織り成される事件を「しるし」として彼らの前に示したのであるが、人々はこれを見聞きしても悟ることがなかった。人々の心は、出エジプトの民がカナンの地を目指して荒野を旅した時と変わることなかつた。「あなたが、自分の目で見たあの大きな試み、それは大きなしるしと不思議であった。しかし、主は今日に至るまで、あなたがたに、悟る心と、見る目と、聞く耳を、下さらなかつた」（申29章3、4）。

最近では頑迷預言について、上村と関根の両極端の主張がある。上村は「こ

これまで＜頑迷預言＞として扱われてきたイザヤ書 6 章 9～10 節は、確かにそのオリジナルな段階では＜頑迷預言＞であった可能性が高い（事後預言ではあるが）。しかしイザヤ書の編纂者は、もはや＜頑迷＞のみの預言としてイザヤの言葉を受け入れることはできなかった。そこで末尾に立ち帰りと癒しという＜救済預言＞を付加した。おそらくこれは、捕囚後のシオン帰還という体験の反映であったろう。この付加によって、もはやこの預言は＜頑迷＞ではなく＜救済＞を志向する預言として理解されることになった⁵ と、オリジナルの段階では「頑迷預言」（事後預言としての頑迷預言であったが）であった可能性が高いが、「頑迷」のみの預言としてイザヤの言葉を受け入れることが出来なかったイザヤ書の編纂者による付加とし、この箇所を「救済預言」と取る。

これに対して関根は同書において、上村説の本文批評をめぐる難点として「6 章 10 節末尾に救済の希望が付加されていると読むとき、再び頑迷の継続を強調する 11 節以下とどう繋がるのか、また 13 節末尾に救済を読むならば、10 節の性急な救済の先取りは如何にも拙速とはならないか、といった点にも躊躇とするならば、こうした全体の思想と関連した吟味は不可欠となるはず」⁶ とし、註において「上村論文は註の 20 で『私見では、元来の頑迷預言は、捕囚という出来事に対する説明、一種の＜事後預言＞であり、第一イザヤの使信に遡るものではない』、と明言する。こういう見解が、理性的な近年の解釈の主流かも知れないが、私はそれに対して、理性を超えたものを預言者が語ったとする伝承をそのままに読まなければ、預言者を我々の常識的な地平の徒に引き降ろすだけである」⁷ と預言者を矮小化することの問題点を指摘している。

次に新約聖書における引用を見てゆくのだが、そのためにはまずイザヤ 6

⁵ 上村 静「イザヤ書 6 章 9-10 節 一頑迷預言？一」『聖書学論集 34』日本聖書学研究所、2002、54 頁

⁶ 日本聖書学研究所、前掲書、関根清三「イザヤの頑迷預言をめぐる覚書 一 一拙訳の論評にお応えしつつ——」、81 頁

⁷ 関根清三、前掲書、87 頁

章 9～10 の 70 人訳⁸を見ておく必要がある。

9 節

καὶ εἰπεν πορεύθητι καὶ εἰπὸν τῷ λαῷ τούτῳ ἀκοῇ ἀκούσετε καὶ οὐ μὴ συνῆτε καὶ βλέποντες βλέψετε καὶ οὐ μὴ ἴδητε

10 節

ἐπαχύνθη γὰρ ἡ καρδία τοῦ λαοῦ τούτου καὶ τοῖς ωσὶν αὐτῶν βαρέως ἥκουσαν καὶ τοὺς ὀφθαλμοὺς αὐτῶν ἐκάμμυσαν μήποτε ἴδωσιν τοῖς ὀφθαλμοῖς καὶ τοῖς ωσὶν ἀκούσωσιν καὶ τῇ καρδίᾳ συνώσιν καὶ ἐπιστρέψωσιν καὶ λάσομαι αὐτοὺς

4. 「頑迷預言」の新約聖書におけるその意味内容の拡散

そこで、新約聖書における預言について考察を進めてみよう。

(1)種まきのたとえ

a) マタイ福音書との比較（13 章 14～15）

イザヤでは神が命じられた宣教の内容であるのに対して、マタイではそれを聞いた民の側の受け取り方として描写されている。また「聞く」⁹と「見る」¹⁰ がイザヤ 6 章 9 では持続か繰り返しになっているのに対し、マタイでは確実性の表現となっている。そしてイザヤ 6 章 10 では神が「心をかたくなにするように」と命じておられるのに対し、マタイでは民の心の状況の客観的描写となっている。

マタイが頑迷預言を記述した時、①マソレテ本文も、②70 人訳も、③マソレテ本文でも 70 人訳でもない訳が存在していたと思われる。その中でマタ

⁸ 70 人訳聖書についてはエルンスト・ヴュルトヴァイン『旧約聖書の本文研究—ビブリア・ヘブライカ入門』、日本基督教団出版局、1997、81～119 頁を参照。

⁹ קָרְאַת שְׁמַעַת カル・命令形 + カル・不定詞独立形で「聞き続けよ」。

¹⁰ וְאָמַרְתָּ בְּאָמַרְתָּ カル・命令形 + カル・不定詞独立形で「見続けよ」。

イは文脈にふさわしい70人訳を選んで引用したことであろう¹¹。

イエスがアラム語を日常語とし、ヘブル語聖書に親しんでおられたことと、共観福音書記者がかなり自由に「イエスのことば」を取捨選択しているところから、元々はマソレテ本文に近い内容で、しかもイエスご自身が従来の律法解釈から全く自由な意味を持たせつつ使用されたものが、初代教会において、口伝承として伝えられるうちに、マタイの伝承に近いものになって、マタイ福音書として固定化したものと考えられる。

b)マルコ福音書との比較（4章12）

マルコはイザヤの箇所を半分以下、すなわち「彼らは確かに見るには見るがわからず、聞くには聞くが悟らず、悔い改めて赦されることのないため」と要約している。「民」という語がなくなり、一般群衆を指す「彼ら」に換言され、順序も「見る」と「聞く」が反対になり、最後の「いやされる」(ἀφέται)が「赦される」(ἀφίημι)になっている。

マタイと比較すると同じ「種まき」のたとえでもマルコは自己の立場¹²に立ってイエスのことばを縮め、変更していることがわかる。

以上のようにマタイとマルコを比較すると、イエスはただ一度このたとえを話されたと思われるが、両福音書ではイザヤ書の引用の仕方も、またメッセージの強調点なども異なっていることがわかる。「頑迷預言」のマソラ本文と70人訳の翻訳と新約における五つの引用の比較をしながら、色々なケースが想定されるが、ここでは詳細についてふれることはできない¹³。

¹¹ G.L.Archer, G.Chirichigno “Old Testament Quotations in the New Testament” (The Moody Bible Institute, Chicago, 1983)などを参照。これは翻訳の限界、翻訳のズレの問題などを研究するのにも大変役立つ資料である。

¹² マルコの立場ということでは、引用句の前後を比較することによってかなり明らかに知ることができる（参照：マタイ13章14、16とマルコ4章11、13）。

¹³ たとえば山口昇「たとえの目的、マルコ4章10～12」『新聖書注解 新約1』、いのちのことば社、236～240頁において、色々な説を紹介しているが、結論は出でていない。

(2)ルカ—使徒の働き

a)ルカ福音書との比較（8章10）

ルカの福音書8章10はイザヤの最も簡単な断片的引用である。それだけにかえってイエスに対する信仰と不信仰がユダヤ人と教会を分ける決定的な唯一の要素であることを鋭く示す結果になっている。マタイ、マルコと同じ種まきのたとえをルカも引用しながら、使徒28章26～27とローマ書11章に示される新約の救済史の図式を暗示することにもなっている。

b)使徒の働きとの比較（28章26～27）

内容はマソレテ本文に最も近い形をとっている。26節がイザヤの宣教のメッセージとなっているのに対し、27節は民の状況の叙述になっており、この点でパウロはイザヤから離れて種まきのたとえの線に沿っている折衷的な立場と言えよう。

この文脈はユダヤ人が不信の民となりそれが契機となって全世界に福音が宣教されるようになった、ということである。神学的に言えば「神の御国が与えられるのは恵みによるのであって、行いによらない」ということで、ローマ人への手紙へと自然につながっている、「イスラエルは追い求めていたものを獲得できませんでした」（11章7）。ローマ人への手紙11章8はヨハネの思想と同一線上に立ち、「心をかたくなにする」主人公は神であると言っている。この引用は申命記29章4からであるが、同時にパウロがイザヤ6章9～10、29章10を考えていたことは明らかである。こうして申命記神学とイザヤの神学と、次節（ローマ11章9～10）に見られるダビデの神学が、「心をかたくなにする」イスラエル人に焦点を合わせて、出エジプト時代から統一王国時代を経て分裂王国時代を一貫して論旨を進めているのを見る。

以上、ルカ福音書から使徒の働き、そしてローマ人の手紙を考察してきた。使徒の働きではイザヤ6章9～10は使徒の働き28章全体の最後の章の重大な締めくくりの言葉となっている。パウロの宣教に対して「ある人々は彼の語る事を信じたが、ある人々は信じようとしなかった」（28章24）、そこでイ

ザヤ6章9～10を引用し、そして「神のこの救いは、異邦人に送られました。彼らは、耳を傾けるでしょう」（28章28）とパウロの言葉を記し、パウロが「満二年の間、自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎えて、大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた」（28章31）という言葉でこの書を閉じている。

著者ルカは使徒の働きにおいてペントコステからの初代教会の成立と発展の有様を記録しているが、今やこの章を閉じるにあたりこの引用句を起点とし軸として、新しい教会史の展開が始まることを告げている。イザヤ6章9～10は使徒の働き28章26～27に引用句として用いられることによって、教会史の一ページを開く「ことば」となっているのである。

私たちは今日異邦人の教会が主流になった教会史を当然のこととして考えているが、パウロによって福音がユダヤから異邦人に伝えられるようになった歴史の一ページをもう一度、頑迷預言を軸にして考えてみることの意義は大きいと言えるだろう。

（3）ヨハネの引用

a) ヨハネ福音書との比較（12章40～41）

ヨハネは共観福音書の種まきのたとえとは全く違った文脈である。種まきのたとえはすでにイエスの宣教の初期において見られるのだが、12章40はイエスの生涯の最後の数日の記録の中で、イエスに対する人々の不信の態度の説明句となっている。

種まきのたとえでは、イエスご自身の言葉の中に引用されているが、ヨハネではヨハネ自身が説明する文章とし、またその直前の38節にあるイザヤ53章1の引用句と密接な関係を持たせている。ヨハネにとってイザヤ6章9～10と53章1は同じイザヤの言葉であるだけでなく、同じ内容を表現する言葉として理解されたのである。その内容とは、「人々がイエスのしるしを見、イエスの言葉を聞きながら、信じなかつた」事実にほかならない。この事実を、ヨハネはイザヤ53章1と6章9～10を引用しつつ、人間の側からではなく、主の経緯の立場から理解した。

引用は6章10のみとなっているが、マソレテ本文でもなく、70人訳でもなく、

第三の引用と呼ぶべきものである。イザヤ書では、民の心をかたくなにする主人公はイザヤであり彼の伝えるメッセージの内容であった。ところが、種まきのたとえでは、心をかたくなにする主人公は民自身である。さらにヨハネは「主は彼らの目を盲目にされた」と言う。また「耳」と「目」と「心」の内、「耳」が省略されている。「民」という言葉も省略され、「彼ら」に換言されている。また「立ち返る」（**ပေါ်**）は「回心する」（στρέφω）となっている。

ヨハネはマソレテ本文でもなく、70人訳でもなく、第三の本文というものがあって、それをもとにしながらヨハネ自身が文脈にふさわしく、引用聖句を自由に取捨選択し、変更したと考えられる。

5. ヨハネ福音書から再びイザヤ書へ——聖書解釈の循環性

ここまで我々は「頑迷預言」の旧約から新約における成就という方向で考察をすすめてきたが、ポストモダンの時代にあって、聖書解釈の一つの新しい試みとして、新約本文から旧約本文へという方向を考えてみたい。それによって、イザヤ書全体をどうとらえるかという新しい視点と、そこから「透けて見える」ものに考察を進めることができる。

イザヤ53章1において「私たちの聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕は、だれに現れたのか」と言われている。この疑問の文章は反語であって、私たちの聞いたことを誰も信じることが出来なかつたと言い替えることが出来る。イザヤ40章以下には「四つのしもべの歌」¹⁴が登場するが、特に53章の「苦難のしもべ像」について人間は、理性能力によっては信じることが出来ない、と主張しているのである。

「主のみ腕は、誰にあらわれたのか」。理性能力によって理解することができない「苦難のしもべ」の秘密は「主の御腕」、すなわち聖霊によって信じる人々に啓示せられるものである。このように考える時に、私たちは新しい光を与えられて6章9～10を読み、さらに6章のイザヤの召命物語を読む

¹⁴ 四つのしもべの歌（42章1～9、49章1～6、50章4～9、52章13～53章12）は、53章4で頂点に達している。

ことが出来るのではなかろうか。

さてそのヨハネは「イザヤがイエスの栄光を見たからで、イエスをさして言ったのである」（41節）と言う。

ταῦτα εἰπεν Ἡσαΐας ὅτι εἰδεν τὴν δόξαν αὐτοῦ,
καὶ ἐλάλησεν περὶ αὐτοῦ

これをヘブル語に逆に訳してみると次のようになる。

את הדרברין האלה אמר יעשה בראותו את כבודו ועליו דבר

新約のヨハネ 12 章 41 では単なる三人称の代名詞であって、それは文脈上イエスを指しているのは明らかであって、新改訳、新共同訳、口語訳で「イエスの栄光を見、イエスについて言った」と訳しているのは間違いではない。

文語訳は後の方だけ「イエスに就きて語りしなり」としている。ところが、英訳、ドイツ語訳、フランス語訳は大体が三人称の代名詞を使っている。The NIV Study Bible では前の方は “Jesus Glory” となっている。また、Jerusalem Bible 英語版も、文語訳と同じく後の方が “referred Jesus” となっている。

新約だけを見るならばこれは間違っているとは言えない。しかしへブル語の כבודו、עליו を参照しつつイザヤ書の内容を逆に見てゆくならば、ヨハネ福音書の 12 章で見られるイエスの栄光に、イザヤ 6 章でイザヤの告白している「私は主を見た」の「主」とか、53 章の「苦難のしもべ」が「透けて見える」というのは言い過ぎだらうか。

ヨハネ 12 章 41 の「主の栄光」から逆に見て、6 章 3 のセラフィムの贊美による「栄光」を語句的に考察しても十分の成果はあげられず、むしろ「イエス」と意訳されている「彼」に焦点をあてることが重要である。

「イザヤが主を見た」ということが 6 章の出発点であり、また 6 章全体の要約でもある。そしてその時のイザヤには明確でなかったが、やがて晩年になって苦難のしもべ像において明らかにされた啓示を内包するような神を見る体験であった。このことをはっきりさせると、いくつかの重要な神学的问题点が明らかになってくる。

第一に、ここで用いられている「主」は「アドナイ」 (אֱלֹהִים) という普通の主従関係に用いられる用語である。6 章 3 でセラフィムは「聖なる、万軍の主」と讃美し、そこでは神である主をあらわす「ヤハウエ」 (יְהוָה) 以下

「ヤハウエ」で統一）が用いられている。5 節、12 節も同様に「ヤハウエ」が用いられているから、ここでイザヤは意図的に「ヤハウエ」という用語を避けている。すなわち、イザヤは「主を見た」けれども、それは人間の目で見ることのできないお方であった。聖書の証言によれば、誰も神を見た者はなく、見た者は死ぬと言われている¹⁵。しかし一方で、「神を見る」ということも真理である¹⁶。イザヤの召命の出発点は「神を見た」という現実にある。しかし、それは「神を見ることも、描くこともできない」という真理を含む現実であった。

イザヤは「主」という用語の選び方をはじめ、この 6 章の記録の表現を通して注意深く、神の啓示の本質を明らかにしている。それは（普通、第二イザヤに属しているとされる）45 章 15 の「ご自分を隠される神」の告白に導かれていく。

さらに 6 章 1 で「高くあげられた王座に座しておられる主を見た」と言われているが、その主がどのような姿であったかは言われていない。また、衣のすそが神殿に満ち、煙¹⁷も立ち上っていたので、実際に主を見ることはできなかつたであらう。

また、イザヤが「どこで」主を見たかについて言われていないし、ソロモンの神殿や至聖所の図を見ても、実際に一定の場所を想定することは不可能である。4 節では「敷居の基はゆるぎ」とあるので、神殿の入口にふせっていたとも考えられる。しかし、そこから神の座しておられる王座やすそを見ることは、どのような情景であったのか、想像することは困難である。

いずれにせよ、イザヤの召命体験は「主を見た」ということが出発点であったが、それは単なる視覚の問題ではなく、セラフィムの声はイザヤの聴覚に響き、煙は臭覚に訴え、さらに燃えさかる炭は触覚から味覚までを貫くものであった。さらに、ヨハネの証言は 6 章のイザヤが「主を見た」体験が、イザヤ 53 章の苦難のしもべと結びつけられていることを示している。普通、第一イザヤに帰せられる 6 章と、第二イザヤに帰せられる主のしもべの歌を

¹⁵ 参照：出エジプト 33 章 20、ヨハネ 1 章 18、I テモテ 6 章 16

¹⁶ マタイ 5 章 8

¹⁷ この「煙」は神殿の祭壇でいけにえをささげる時に立ち上る煙であるだらう。

ひとりのイザヤの体験としてとらえたのである。

その内容とは、ヨハネ 12 章 37 に言われているように、人々がイエスのしるしを見、イエスの言葉を聞いても信じなかつた事実の逆の側面に他ならない。この事実をヨハネはイザヤの 6 章と 53 章のこれらの言葉を引用しつつ、主の経緯の立場から理解したのである。

結語 旧約から新約へ、そして新約から旧約へ

旧約聖書が新約聖書にどのように引用されているか、詳細に引用句を検討することはあまりなされてこなかつた。ひとつは、ヘブル語、アラム語とギリシャ語の両者を比較することの困難性による。第二は、旧約聖書の本文についてオリジナルなテキストを特定することの困難性による。また、確定的な 70 人訳ギリシャ語原テキストとそれを支持する 70 人訳写本というものがあるわけでもない。また、新約のテキストについても然りである。第三は、それが引用された時の状況と現在の新約本文にいたるまでの多様で複雑な過程を、いわゆる編集史的に考察することの困難性である。

本論文はこうした少なくとも三つの困難をふまえながら、逆に新約に引用されている「頑迷預言」を例として旧約に逆投影してみることはできないかという試論である。

それによって「聖書は誤りのない神の言葉」であつて、いつも「聖書のことばをそのままにしておかねばならない」という命題と、そのことばの奥に「透けて見えてくるもの」が何であるかを考察してゆくと、最初に引用したルターの「聖書の読み方」にかえってこざるを得ないのである。

【付 錄】 イザヤ書の新約聖書における引用

ベルンハルト・ドゥームによって¹⁸、イザヤ 40～55 章は第二イザヤによって、56 章以下は第三イザヤによる預言とせられてから、詳細においては違いがあつても、今日迄、第二イザヤ説は主流となつてゐる。40～55 章は前 8 世紀のアモツの子イザヤの預言であり、バビロン捕囚の終り頃、クロスの登場とバビロンからの解放を預言した第二イザヤと呼ばれる無名の人物の預言であったとする。彼はオリエントの宇宙観と、預言者たちの高い倫理性をもつたヤハウェー神教を融合し、アモツの子イザヤよりもすぐれた神觀を打ち出したとする。

また、ドゥームは四つの「主のしもべの歌」を 40～55 章から切り離した。「42 章 1～4、49 章 1～6、50 章 4～9、52 章 13～53 章 12」の主のしもべの預言は、まず文体が極めてよく整つた静かな調子であることに気づかされる。これらの文体と思想は、第二イザヤと似ているが、しかし、前後との結び付けがゆるやかで、この四つの歌を取り去っても穴があかない。勿論、他にもそのような箇所があることは認めなければならないが。

また、これらの歌の最も重要な思想である、神のしもべの像は第二イザヤにおいて、イスラエルは文字通り主のしもべであつて、主に選ばれ、守られ、栄光ある未来が約束されているのであるが、このしもべの歌においては、盲目で、おしで、捕らえられ、強奪され、異邦人に侮られ、罪に満ちた「虫」として描かれている¹⁹。

これに対して、福音的な注解においては、一貫して統一性が主張されてきた。たとえば、A. モティヤー²⁰は、文体の構造分析を主体として統一性を論じている。

新約聖書の引用は一貫してイザヤ個人の預言として論旨を展開している。同時にそれは、主のことばであり（マタイ 1 章 22、23）、神のことばであり（II コリント 6 章 2）、聖霊の導きによるものであり（使徒 28 章 25）、律法

¹⁸ ドゥーム『イザヤ書』、1892 年

¹⁹ ドゥーム、前掲書、311 頁

²⁰ Alec Motyer, *Isaiah, Tyndale Old Testament Commentaries*, 1999.

のことば（Iコリント14章21）でもあった。

新約章節	引用法	イザヤ	仮説による区分
マタイ3章3	預言者イザヤによって	40章3	第二イザヤ
〃4章14～16	預言者イザヤを通して	9章1～2	第一イザヤ
〃8章17	預言者イザヤを通して	53章4	第二イザヤ
〃12章17～21	預言者イザヤを通して	42章1～4	第二イザヤ
〃13章14～15	イザヤの告げた預言（イエスの発言）	6章9～10	第一イザヤ
〃15章7～9	イザヤは預言している（イエスの発言）	29章13	第一イザヤ
マルコ1章2～3	預言者イザヤの書	40章3	第二イザヤ
〃7章6～9	イザヤは預言をして（イエスの発言）	29章13	第一イザヤ
ルカ3章4～6	預言者イザヤのことばの書	40章3～5	第二イザヤ
〃4章17～19	預言者イザヤの書	61章1～2	第三イザヤ
ヨハネ1章23	預言者イザヤが言ったように	40章3	第二イザヤ
〃12章38～41	預言者イザヤのことば	53章1	第二イザヤ
	イザヤがまた次のように言った	6章9～10	第一イザヤ
使徒8章28～35	預言者イザヤの書	53章7～8	第二イザヤ
〃28章25～27	聖靈が預言者イザヤを通して	6章9～10	第一イザヤ
ローマ9章27～28	イザヤがこう叫んでいます	10章22～23	第一イザヤ
〃9章29	イザヤがこう預言したとおりです	1章9	第一イザヤ
〃10章16	イザヤは言っています	53章1	第二イザヤ
〃10章20	イザヤは大胆にこう言っています	65章1	第三イザヤ
〃10章21	こう言っています	65章2	第三イザヤ
〃15章12	イザヤがこう言っています	11章10	第一イザヤ

【主な参考文献】

- 鍋谷 堯爾 「イザヤ書」『新聖書注解 旧約3』、いのちのことば社、2002、477～655頁
- 鍋谷 堯爾 「人間イザヤとその預言」、いのちのことば社、2000
- 岸本 紘 「<新改訳聖書>の歴史と現状と将来」『聖書解釈を考える』、いのちのことば社、2004
- 上村 静 「イザヤ書6章9～10節 一頑迷預言?一」『聖書学論集34』、日本聖書学研究所、2002、23～67頁
- 関根 清三 「イザヤの頑迷預言をめぐる覚書 一拙訳の論評にお応えしつつ一」前掲書、69～88頁
- Archer, G.L., G.Chirichigno, *Old Testament Quotations in the New Testament*, The Moody Bible Institute, Chicago, 1983
- Duhm, B, *Das Buch Jesaiah*, Ubersetzt und erklärt, Vandenhoeck, 1892
- Motyer, Alec, *Isaiah*, Tyndale Old Testament Commentaries, 1999.
- Yong, Edward, *The Book of Isaiah*, I, II, III, Ermans, 1965～72

*頸椎ヘルニア術後間もないため、本論文は砂原律子氏（学会員）の口述筆記によるものである。